

俳人協会新潟県支部報

No. 90

令和5年4月15日

令和5年度県支部総会記

石黒正勝

令和5年3月12日(日)午後1時より「新潟市民会館」に於いて、県支部総会と併催句会がコロナ禍がようやく下火となりつつある中に感染対策を行い開催された。

総会は、熊谷幹事長の開会宣言に始まり次第に則り進められた。

冒頭、山口啓介支部長の開会挨拶がありコロナ禍の中で令和5年度の通常総会を開催した処、34名のご出席を頂いた。新潟県の地域特性は北から南までの長い海岸線を持ち気候条件や地域特性が異なる中34名の出席は少ないように見えるがよく集まっていたのだと感謝している。本部からは遠路ご多忙中にもかかわらず



らず森岡正作先生のご出席を頂いた。御指導をいただき新潟の俳句の世界が更に発展することを願うと挨拶。

森岡先生の祝辞と俳人協会の現状について。新潟支部の総会お祝申し上げます。コロナ禍により俳人協会も対面の事業がオンラインや句会をメールなどいろいろの影響を受けた。昨年には俳人協会創立60周年記念式典を実施出来た。俳人協会も年々高齢化が進んできている。新潟支部の皆様と関係により深めてくるようにと言付かってきたと話された。

なお、各議案はそれぞれ満場一致で可決承認され総会は終了した。引き続きの併催句会は県支部の旗本春美幹事が披露を務めた。森岡正作先生は、講評にあたり出身は神奈川県で雪国新潟にはま

だ雪があるものと想像していたがまったく無く思いは外れたと話され講評に入ると出席者は熱心に聞き入っていた。森岡正作先生(特選3句)
雪搔きの外は余白や農日記
高埜 健蔵
春遅々と昨日の鳥を今日も見
川崎 陽子
牙返る寺に消火器消火栓
土屋 瞳子
森岡正作先生(佳作12句)
雪が降る雪の白さに疲れをり
山口 啓介
杉の秀の天朗々と弓始め
矢澤彦太郎
畏一つ仕掛ける枯の深きところ
井口 光雄
悪友といふもの知らず葱坊主
山口あつ子
枝撓ふほど押し合へる寒雀
須賀 智子
冬の蠅骸と見れば失せにけり
たが 啓子
深雪暗れ幹に耳あて鼓動聴く
倉井 幸子
百までとつぶやく母や辛夷咲く
渡辺 徳治
冬の月雁木通りの途切れから
村山 靖子
帰京子の荷に寒餅を加へけり
畠野 旬子
朝刊の紙面貫く雪湿り
本間 加津

併催句会高得点句
雪解鬮橋渡らねば行けぬ村
下條 春秋
春炬燵記憶の中の父の膝
戸田 一子
雪搔きの外は余白や農日記
高埜 健蔵
杉の秀の天朗々と弓始め
矢澤彦太郎
早春の沖に寝釈迦のやうな佐渡
平賀 寛子
靴底を返す力や春の土
渡辺 徳治
ものの芽やそれぞれにあるところざし
村山 靖子
指揮棒の見えぬ囁り始まりぬ
土屋 瞳子
四世代の主役は赤子初座敷
番場勢津子
手を上げるとこがバス停野水
高埜 健蔵

冬すみれひとに知られぬまま
渡辺 信子
でよい

(合点成績)
()内は特選得点
一位 14点(2) 矢澤彦太郎
二位 12点(5) 下條 春秋
三位 11点(1) 土屋 瞳子
四位 11点(1) 山口 啓介
五位 10点(2) 高埜 健蔵
次点 10点(1) 村山 靖子

俳人協会新潟県支部

「第5回支部大賞」

及び各賞

大賞

水底のやうな静寂や今日の月

佐藤とよ

大賞

鯛焼や記憶の薄れゆく父と

鈴木正芳

準賞

鉄を打つ音の重さの雪催

本宮修

合 点 賞

順位
得点
特選

代表句

22	6	0	傾きし舟小屋の戸に注連飾	水野 宗子
21	6	0	稲掛けて日当たる方を表とす	井口 光雄
20	6	0	他愛なき老いの緑り言秋日和	高埜 健蔵
19	6	0	甲高き朝の鶏鳴深雪暗	森山 暁湖
18	6	0	ひと曲がりごとに深まる山紅葉	榎本 栄子
17	6	0	コスモスの中の笑顔を撮りにけり	佐藤 昭子
16	6	0	我が影のとながつてゐる寒さかな	荒川 完石
15	6	1	離れてはまたも見直す松手入	佐藤 正子
14	7	0	流水の相をあらはに川涸るる	秋山 保子
13	7	2	一塊の雲吹き残す野分暗	本間エミ子
12	7	2	伊夜日子のけふ暗ればれと田の仕舞	矢澤彦太郎
11	8	0	陽は山へすとんと暗くなる刈田	下條 春秋
10	8	1	こんにやくは今も三角おでん鍋	渡辺 信子
9	8	1	冬山を従へ大河曲がりけり	渡辺 徳治
8	8	2	文化の日父の万年筆太し	村山 靖子
7	8	2	靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む	村田 恭子
6	8	3	白鳥の啼く声星を殖やしけり	久和原 賢
5	9	1	小鳥来る廃校跡の民具館	番場勢津子
4	9	2	冬菫こんなになに青い空がある	土屋 瞳子
3	10	1	真つ白なハンカチ心理学教授	鳥羽サチイ
2	10	1	雪囲ひ海見る窓を残しおく	佐藤さき子
1	10	2	言葉少し足して別るる石路の花	渡辺 長子

表の補足説明

※合点賞の順位で同点の場合は、特選句数、高得点句、受付順を優先条件とした。

(選考経過概要)

第5回新潟県支部大賞は、例年通り全会員を対象として募集し、一〇五名、三二五句の応募があった。(昨年は一〇四名、三〇四句)

選考は先ず、17名の選考委員より特選3句、佳作20句を選んでいただいた。その結果、得点上位の13句(6点以上)を候補作品とし、その中より

支部大賞候補作品(6点以上13句)

番号	得点	特選	句
52	7	2	水底のやうな静寂や今日の月
119	7	2	鯛焼や記憶の薄れゆく父と
26	7	1	靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
123	7	1	雪囲ひ海見る窓を残しおく
16	6	2	鉄を打つ音の重さの雪催
210	6	2	文化の日父の万年筆太し
221	6	2	言葉少し足して別るる石落の花
139	6	1	離れてはまたも見直す松手入
183	6	1	小鳥来る廃校跡の民具館
258	6	1	冬山を従へ大河曲がりけり
39	6	0	流木の相をあらはに川涸るる
79	6	0	真つ白なハンカチ心理学教授
310	6	0	我が影のとながつてゐる寒さかな

(最終候補作品)

委員全員から大賞、準賞の候補句としてそれぞれ1句選んでもらい、2月12日開催の選考委員会にその結果を持ち寄った。欠席委員には事前に文書にて提出いただいた。委員長に山口支部長を選出し全員の選考結果にもとづき審議し、最終的には次の3句に絞った。選者は作者名を伏せて審議した。

・水底のやうな静寂や今日の月

・鯛焼や記憶の薄れゆく父と鉄を打つ音の重さの雪催

それぞれ別の句について、支部大賞に相応しい格調の高さかどうか、類句類想になっていないかなど評価する点と問題点について意見を交わしながら審議をすすめた。上位の2句が最後まで拮抗し甲乙付け難く、今回は大賞2句、準賞1句を受賞句とした。

合点賞は、大賞・準賞の受賞者を除く22名(6点以上)が受賞した。

なお、選考委員会は、今後の選考の進め方についても意見を交換した。選考委員に外部からも入れてはどうか、2次選の候補句の数はもう少し絞った方がよいのではないかと、また、選句結果(得点)は表示しないで選をしたらどうか、さらに合点賞は支部大賞の趣旨から言っていかがなものか、むしろ高得点句での順位にすべきと言った意見が出された。これらの意見については、今後の選考委員会で検討していくこととした。

役員体制について

支部長・山口啓介(野火)

副支部長・上野昭一(かまつか)

副支部長・石黒正勝(無所属)

副支部長・井口光雄(春野)

顧問・森山曉湖(墨方家)

顧問・矢澤彦太郎(河)

参 与・川崎陽子(河)

参 与・山之内喜七(庭)

参 与・若井新一(春雨)

参 与・赤塚五行(朱鷺)

幹事長・熊谷國男(一章)

△監事▽

倉井幸子(河)

本間加津(春雨)

△新潟県俳句大会 委員▽

委員長・矢澤彦太郎

委員・山口啓介・渡辺徳治・井口光雄・水野宗子・川崎陽子・平賀寛子・旗本春美・山口あつ子・熊谷國男

△支部大賞選考委員会委員▽

委員長・山口啓介

委員・矢澤彦太郎・川崎陽子・森山曉湖・赤塚五行・井口光雄・井澤秀峰・石黒正勝・上野昭一・越野蒼穹・関千年雄・水野宗子・山之内喜七・山口あつ子・若井新一・渡辺徳治・熊谷國男

△支部報編集委員▽

委員長・渡辺徳治

委員・旗本春美

事務局(兼務)

△幹事▽

井澤秀峰(汀)

越野蒼穹(銀化)

白澤陽子(蘭)

関千年雄(萌)

土屋瞳子(野火)

寺尾亜真李(銀化)

戸田一子(野火)

畠野旬子(青山)

旗本春美(野火)

平賀寛子(春耕・あきつ)

水野宗子(汀・かまつか)

山口あつ子(野火)

山城やえ(春耕・あきつ)

渡辺徳治(鷹)

俳人協会新潟県支部

第5回支部大賞

入選作品

森山 曉湖 選

矢澤彦太郎 選

特選

秋冷や大気ゆきりと牛が立つ
仰ぎ見る樺大樹に秋の声
日記買ふ語彙の増えゆく子を抱きて

山之内喜七
本間エミ子
鈴木正芳

特選

佳作

佳作

山根まで稲田一望風渡る
児童画の龍伸び伸びと文化祭
盆踊り活気付くなり田舎節
靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
丸南瓜ボンと叩いてみたくなり
流水の相をあらはに川涸るる
恙なき明日を信じて大根干す
受験子の桂馬跳びして帰りけり
大根引く妻の背が負ふ地平線
省略のきかぬ子育て春遠し
高僧の蘊蓄を聴く柿すだれ
離れてはまたも見直す松手入
山古志の鯉かたまつて春を待つ
小鳥来る廃校跡の民具館
平穩と書けば平穩初日記
青空の見えて轟く鱗起し
鳥渡る一度戦に負けし国
ひと曲りごとに深まる山紅葉
陽は山へすとんと暗くなる刈田
稽田へ眩くやうに夕汽笛

林 照江
仲川康子
武本松久
村田恭子
川久保妙香
秋山保子
佐藤とよ
関 千年雄
久和原 賢
坂井文繪
川崎陽子
佐藤正子
矢澤彦太郎
番場勢津子
鶴巻雄風
水野宗子
服部かねよし
榎本栄子
下條春秋
大島いと女

紅葉山みんなにこにこ下りて来る
髭剃りてかほ正したる終戦日
地図に無き処へ寄りし神の旅
一塊の雲吹き残す野分晴
雑木山ひそかに冬が押しして来る
色鳥の来るつくばひに水満たす
九十の兄より届く今年米
鯛焼や記憶の薄れゆく父と
雪囲ひ海見る窓を残しおく
ちちははの歳月庭の山茶花に
木洩れ日や泣きほくろある菊人形
離れてはまたも見直す松手入
飛ぶ朱鷺の朱濃し稲刈るころなれば
色鯉の錦を散らす水の秋
明日しれぬ身や紅葉山紅葉川
こんにやくは今も三角おでん鍋
青空の見えて轟く鱗起し
言葉少し足して別るる石路の花
コスモスの中の笑顔を撮りにけり
鈴生りの柿落つるまま生家跡

佐藤とよ
井口光雄
織田亮太郎
本間エミ子
山口啓介
相澤秋生
戸田一子
鈴木正芳
佐藤さき子
羽生雅春
川崎陽子
佐藤正子
たが啓子
倉井幸子
小出利恵
渡辺信子
水野宗子
渡辺長子
佐藤昭子
畠野旬子

山口啓介選

特選

九十の兄より届く今年米 戸田一子
伊夜日子のけふ晴ればれと田の仕舞 矢澤彦太郎
冬山を従へ大河曲がりけり 渡辺徳治

佳作

鉄を打つ音の重さの雪催 本宮 修
手のねばり水のねばりや紙を漉く 寺尾亜真李
恙なき明日を信じ大根干す 佐藤とよ
稲架掛けて日当る方を表とす 井口光雄
地図に無き処へ寄りし神の旅 織田亮太郎
省略のきかぬ子育て春遠し 坂井文繪
鮭番屋月の雫を屋根に置く 佐藤さき子
冬囲島人の守る能舞台 佐山香代子
包丁に銘の刻印文化の日 番場ノリ子
小鳥来る廃校跡の民具館 番場勢津子
雪下へ大根五本残しけり 佐藤捷司
平穏と書けば平穏初日記 鶴巻雄風
冬霧や夜明の遅き峡の村 山本 浩
半島の影あきらかに野分晴 間 恵子
冬董こんなな青い空がある 土屋瞳子
文化の日父の万年筆太し 村山靖子
傾きし舟小屋の戸に注連飾 水野宗子
洒落気まだ残して選ぶ冬帽子 渡辺長子
鳥渡る一度戦に負けし国 服部かねよし
我が影のとんがつてゐる寒さかな 荒川完石

赤塚五行選

特選

白鳥の啼く声星を殖やしけり 久和原 賢
寒薔薇白極まりてみどりさす 羽賀晴子
鷹渡るたびに深まる虚空かな 櫻井詩子

佳作

灯台の螺旋階段秋高し 高埜健蔵
鎌上げて朝の挨拶いぼむしり 上野昭一
鉄を打つ音の重さの雪催 本宮 修
靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む 村田恭子
流水の相をあらはに川溜るる 秋山保子
水底のやうな静寂や今日の月 佐藤とよ
茸有りますと貼紙映の家 小池旦子
新葉ぞ一字まもる大草鞋 鳥羽サチイ
色鳥の来るつくばひに水満たす 相澤秋生
手を赤く大根白く洗ひけり 相馬行行子
甲高き朝の鶏鳴深雪晴 森山暁湖
山古志の鯉かたまつて春を待つ 矢澤彦太郎
明日しれぬ身や紅葉山紅葉川 小出利恵
冬萌や埴輪の肌火のなごり 土屋瞳子
笹子鳴く金銀山へ岐る径 山城やえ
言葉少し足して別るる石路の花 渡辺長子
吊橋の揺るる真ん中溪紅葉 金子 功
冬山を従へ大河曲がりけり 渡辺徳治
空軋むかに白鳥の雲となる 下條春秋
長老の破顔で終はる報恩講 浜松智弘

特選

雑木山ひそかに冬が押し来る 山口啓介
文化の日父の万年筆太し 村山靖子
言葉少し足して別るる石路の花 渡辺長子

佳作

灯台の螺旋階段秋高し 高埜健蔵
秋茄子や村に久しき嫁話 上野昭一
秋冷や大気ゆきりと牛が立つ 山之内喜七
うす紙をかさね立冬来たりけり 関 千年雄
真つ白なハンカチ心理学教授 鳥羽サチイ
仰ぎ見る樺大樹に秋の声 本間エミ子
バンダナにマドロスパイプ日向ぼこ 相馬行行子
甲高き朝の鶏鳴深雪晴 森山暁湖
踏むために少し残して落葉掃く 関矢紀静
雪囲ひ海見る窓を残しておく 佐藤さき子
梨甘し剥きくれる人いつも居て 中野太浪
小鳥来る廃校跡の民具館 番場勢津子
冬董こんなな青い空がある 土屋瞳子
缶蹴れば冬の音する声のする 渡辺信子
誰も来ず眼差し据ゑて焚火守る 山城やえ
コスモスの中の笑顔を撮りにけり 佐藤昭子
啄木鳥や己の音にふと止みぬ 中村昭義
冬山を従へ大河曲がりけり 渡辺徳治
皆我を追ひ越してゆく師走かな ささき万稚
太陽の老いゆく深き霧の中 服部かねよし

井口光雄選

井澤秀峰選

石黒正勝選

上野昭一選

特選

日記買ふ語彙の増えゆく子を抱きて 鈴木正芳
 手術終え秋夕焼に指輪はむ 清水恵子
 声出せば挽歌となりぬ雪ほたる 赤塚五行

特選

吸ふ息に光の粒子冬銀河 大島いと女
 冬萌や埴輪の肌火のなごり 土屋瞳子
 鉄を打つ音の重さの雪催 本宮 修

特選

鉄を打つ音の重さの雪催 本宮 修
 離れてはまたも見直す松手入 佐藤正子
 木洩れ日に明日への力冬木の芽 小栗八重

佳作

他愛なき老いの繰り言秋日和 高埜健蔵
 鉄を打つ音の重さの雪催 本宮 修
 手のねばり水のねばりや紙を漉く 寺尾亜真李
 流水の相をあらはに川涸るる 秋山保子
 秋の夜や母の鞆の小銭入 小池旦子
 髭剃りてかほ正したる終戦日 井口光雄
 白靴や義足入れて確かめむ 鳥羽サチイ
 雑木山ひそかに冬が押し来る 山口啓介
 白鳥の啼く声星を殖やしけり 久和原 賢
 投げ釣りの鉤の先なる冬の虹 浜田萱草
 雪囲ひ海見る窓を残しおく 佐藤さき子
 滝音へ曲がり多しや紅葉踏む 古川よし秋
 身にしむや白骨拾ふ長き箸 熊谷國男
 小鳥来る廃校跡の民具館 番場勢津子
 冬萌や埴輪の肌火のなごり 土屋瞳子
 こんにやくは今も三角おでん鍋 渡辺信子
 洒落気まだ残して選ぶ冬帽子 渡辺長子
 湯治場のいろりを囲む小座布団 齊藤はるい
 長き夜のひらきしままや黙示録 渡辺徳治
 白鳥の飛翔朝日を凌駕して 下條春秋

佳作

流水の相をあらはに川涸るる 秋山保子
 用いたき文字もて遊ぶ星月夜 山之内喜七
 稲架掛けて日当る方を表とす 井口光雄
 酔海鼠をしつぽり嗜んでゐて一人 十見達也
 一塊の雲吹き残す野分晴 本間エミ子
 この世みな迷つてゐたる穴惑 山口啓介
 甲高き朝の鶏鳴深雪晴 森山眺湖
 省略のきかぬ子育て春遠し 坂井文繪
 蛙番屋月の雫を屋根に置く 佐藤さき子
 高僧の蘊蓄を聴く柿すだれ 川崎陽子
 色鯉の錦を散らす水の秋 倉井幸子
 夕東風や門灯あはき漁師町 番場勢津子
 冬霧や夜明の遅き峡の村 山本 浩
 寒梅やただ一輪のための空 土屋瞳子
 伍蹴れば冬の音する声のする 渡辺信子
 言葉少し足して別るる石蔭の花 渡辺長子
 緑蔭や雨に寂びたる牧之句碑 宮田悦子
 湯治場のいろりを囲む小座布団 齊藤はるい
 啄木鳥や己の音にふと止みぬ 中村昭義
 齒応へをひと味加へ秋茄子 秋山保子

佳作

靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む 村田恭子
 手のねばり水のねばりや紙を漉く 寺尾亜真李
 ベランダは混み合つてをり掛大根 高柳 暁
 出来秋の軽トラックの忙しなく 片桐さと子
 愛情と非情のあはひ菜を間引く 十見達也
 コーヒーの冷めて美味なる十三夜 本間エミ子
 浅漬けの青きを盛りて小豆粥 浜田萱草
 雪囲ひ海見る窓を残しおく 佐藤さき子
 梨甘し剥きくれる人いつも居て 中野太浪
 冬囲島人の守る能舞台 佐山香代子
 包丁に銘の刻印文化の日 番場ノリ子
 入院の吾子へりんこの皮リボン 山本武子
 万障を繰り合はしたる報恩講 稲垣和江
 平穏と書けば平穏初日記 鶴巻雄風
 こんにやくは今も三角おでん鍋 渡辺信子
 冬帝の廻廊モネとゴッホの絵 渡邊幸子
 子育てに泣き笑ひして十二月 八子栄子
 皆我を追ひ越してゆく師走かな ささき万稚
 陽は山へすとんと暗くなる刈田 下條春秋
 穆田へ呟くやうに夕汽笛 大島いと女

川崎陽子選

特選

冬菫こんな青い空がある
 言葉少し足して別る石路の花
 皆我を追ひ越してゆく師走かな

土屋瞳子
 渡辺長子
 ささき万稚

特選

秋冷や大気ゆざりと牛が立つ
 一塊の雲吹き残す野分晴
 夜業の手休め焼き米ひとつまみ

山之内喜七
 本間エミ子
 越野蒼穹

特選

絵日傘の影を引き連れ石畳
 新葉ぞ一字まもる大草鞋
 鯛焼や記憶の薄れゆく父と

村田恭子
 鳥羽サチイ
 鈴木正芳

佳作

他愛なき老いの繰り言秋日和
 丸南瓜ボンと叩いてみたくなり
 水底のやうな静寂や今日の月
 真つ白なハンカチ心理学教授
 色鳥の来るつくばひに水満たす
 鯛焼や記憶の薄れゆく父と
 雪囲ひ海見る窓を残しおく
 ちちははの歳月庭の山茶花に
 山古志の鯉の貫録豊の秋
 入院の吾子へりんこの皮リボン
 もらぬしをとたりとわけてかきのもと
 夕東風や門灯あはき漁師町
 緑蔭や雨に寂びたる牧之句碑
 コスモスの中の笑顔を撮りにけり
 鳥渡る一度戦に負けし国
 足湯する背に迫りくる紅葉山
 碇泊の船へ銀河の尾の寒し
 子規偲び来し大和路や柿の秋
 途中下車海酸漿の鳴る町に
 長老の破顔で終はる報恩講

高埜健蔵
 川久保妙香
 佐藤とよ
 鳥羽サチイ
 相澤秋生
 鈴木正芳
 佐藤さき子
 羽生雅春
 倉井幸子
 山本武子
 稲垣和江
 番場勢津子
 宮田悦子
 佐藤昭子
 服部かねよし
 小栗八重
 井澤秀峰
 安原 葉
 丘 のぼる
 浜松智弘

佳作

小鳥来る箒目あらき裏参道
 鉄を打つ音の重さの雪催
 流木の相をあらはに川溜るる
 地図に無き処へ寄りし神の旅
 畑中に長き一瞬蛇過ぎる
 山眠る明日へ力蓄へて
 白鳥の啼く声星を殖やしけり
 甲高き朝の鶏鳴深雪晴
 鯛焼や記憶の薄れゆく父と
 門前に一水流る冬紅葉
 伊夜日子のけふ晴ればれと田の仕舞
 山古志の鯉の貫録豊の秋
 冬霧や夜明の遅き峽の村
 傾きし舟小屋の戸に注連飾
 碇泊の船へ銀河の尾の寒し
 道に噴く融雪の水日を弾く
 鷹渡るたびに深まる虚空かな
 ひと曲がりごとに深まる山紅葉
 秋灯し目がつぶれても見たき本
 我が影のとながつてゐる寒さかな

菅井悦子
 本宮 修
 秋山保子
 織田亮太郎
 平賀寛子
 山口啓介
 久和原 賢
 森山眺湖
 鈴木正芳
 川崎陽子
 矢澤彦太郎
 倉井幸子
 山本 浩
 水野宗子
 井澤秀峰
 安原 葉
 櫻井詩子
 榎本栄子
 赤塚五行
 荒川完石

佳作

定年の無き極月の鍵掛け
 夕風に抗はずをり貴船菊
 靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
 白猫に眉毛ありたり十三夜
 ゆづりは雪真つ先に垂りけり
 水底のやうな静寂や今日の月
 稔り田や黄金といふは剣葉にも
 真つ白なハンカチ心理学教授
 畑中に長き一瞬蛇過ぎる
 大根引く妻の背が負ふ地平線
 薄くなる指紋の捲る古曆
 蛙番屋月の雫を屋根に置く
 雪囲ひ海見る窓を残しおく
 今年また団栗出て来母の便
 寒梅やただ一輪のための空
 青空の見えて轟く鱗起し
 戦時下の暮しつぼりと稲の花
 碇泊の船へ銀河の尾の寒し
 道に噴く融雪の水日を弾く
 空軋むかに白鳥の雲となる

本宮 修
 渡辺セツ子
 村田恭子
 池野よしえ
 山口あつ子
 佐藤とよ
 小林純子
 鳥羽サチイ
 平賀寛子
 久和原 賢
 浜田萱草
 佐藤さき子
 佐藤さき子
 山本武子
 土屋瞳子
 水野宗子
 中村昭義
 井澤秀峰
 安原 葉
 下條春秋

熊谷國男選

越野蒼穹選

関 千年雄選

特選

十六夜の真下の戦さかなしめり
白沢陽子
ちちははの歳月庭の山茶花に
羽生雅春
山古志の鯉の貫録豊の秋
倉井幸子

佳作

職退いて妻の傘下よ大根蒔く
高埜健蔵
靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
村田恭子
手のねばり水のねばりや紙を漉く
寺尾亜真李
皆逝きてわれ残さるる後の月
白沢陽子
紅葉山みんなにこにこ下りて来る
佐藤とよ
土壇鍋囲むひとりが酔ひすぎて
井口光雄
軍艦の軸鋭き無月かな
織田亮太郎
新薬ぞ一字まもる大草鞋
鳥羽サチイ
九十の兄より届く今年米
戸田一子
散りどきを待ちてゐしかに銀杏散る
森山眺湖
日記買ふ語彙の増えゆく子を抱きて
鈴木正芳
梨甘し剥きくれる人いつも居て
中野太浪
文化の日父の万年筆太し
村山靖子
不意打の訃報山茶花散つてをり
渡邊幸子
感染者記す歳月古曆
小山洋子
ひと曲りごとに深まる山紅葉
榎本栄子
白鳥の飛翔朝日を凌駕して
下條春秋
鈴生りの柿落つるまま生家跡
島野旬子
長老の破顔で終はる報恩講
浜松智弘
我が影のとんがってゐる寒さかな
荒川完石

水野宗子選

特選

水底のやうな静寂や今日の月
佐藤とよ
鯛焼や記憶の薄れゆく父と
鈴木正芳
華やぎの跡形もなし山眠る
本間加津

佳作

児童画の龍伸び伸びと文化祭
仲川康子
真つ白なハンカチ心理学教授
鳥羽サチイ
仰ぎ見る樺大樹に秋の声
本間エミ子
色鳥の来るつくばひに水満たす
相澤秋生
離れてはまたも見直す松手入
佐藤正子
雪兎故山恋しか跳ねてこよ
熊谷國男
万障を繰り合はしたる報恩講
稲垣和江
夕東風や門灯あはき漁師町
番場勢津子
マフラーの折目ただして歩きけり
渡辺長子
稲穂垂る暇に膝を濡らしけり
宮田悦子
恙なくひとひ暮れたり菊脛
佐藤昭子
雨粒のひかる枝先に冬木の芽
斉藤はるい
啄木鳥や己の音にふと止みぬ
中村昭義
冬山を従へ大河曲がりけり
渡辺徳治
皆我を追ひ越してゆく師走かな
ささき万稚
足湯する背に迫りくる紅葉山
小栗八重
子規偲び来し大和路や柿の秋
安原 葉
ひと曲がりごとに深まる山紅葉
榎本栄子
もみぢ狩帰りは名代蕎麦処
榎本栄子
我が影のとんがってゐる寒さかな
荒川完石

山口あつ子選

特選

九十の兄より届く今年米
戸田一子
伊夜日子のけふ晴ればれと田の仕舞
矢澤彦太郎
小鳥来る廃校跡の民具館
番場勢津子

佳作

定年の無き極月の鱧掛け
本宮 修
県都へと向ふこの道花芒
渡辺セツ子
手のねばり水のねばりや紙を漉く
寺尾亜真李
水底のやうな静寂や今日の月
佐藤とよ
茸有りますと貼紙映の家
小池旦子
稲架掛けて日当る方を表とす
井口光雄
真つ白なハンカチ心理学教授
鳥羽サチイ
草取りの母へ真つ先通信簿
平賀寛子
鯛焼や記憶の薄れゆく父と
鈴木正芳
冬田島人の守る能舞台
佐山香代子
渡し場に風音を聞く落のたう
山本武子
平穏と書けば平穏初日記
鶴巻雄風
寒梅やただ一輪のための空
土屋瞳子
文化の日父の万年筆太し
村山靖子
冬山を従へ大河曲がりけり
渡辺徳治
陽は山へすとんと暗くなる刈田
下條春秋
鈴生りの柿落つるまま生家跡
島野旬子
色変へぬ松従へてレルヒ像
曾武川京子
我が影のとんがってゐる寒さかな
荒川完石
蚕豆の莢のクッション湿りづめ
曾我啓子

山之内喜七選

若井新一選

渡辺徳治選

特選

靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
握る手に冬が来てをり庭箒
掛軸の文字の流るる煤払ひ

水底のやうな静寂や今日の月
雪囲ひ海見る窓を残しおく
色変へぬ松徒へてレルヒ像

特選

特選

秋の夜や母の鞆の小銭入
一点も傷なき屋根や雪下し
省略のきかぬ子育て春遠し

佳作

佳作

佳作

ペランダは混み合つてをり掛大根
鳶の笛澄むや冬立つ奥只見
うす紙をかさね立冬来たりけり
切れ味の悪き包丁冬の雨
投げ釣りの鉤の先なる冬の虹
梨むいてしかと長子であらむこと
炭焼きの跡てふ木の実降るばかり
立冬の空の何処かに嘘がある
寒薔薇白極まりてみどりさす
伊夜日子のけふ晴ればれと田の仕舞
天金に届く日脚の冬めける
小鳥来る廃校跡の民具館
雪下へ大根五本残しけり
平穏と書けば平穏初日記
言葉少し足して別るる石路の花
緑蔭や雨に寂びたる牧之句碑
冬山を従へ大河曲がりけり
大寺に霰たばしる紙燭かな
空軋むかに白鳥の雲となる
長老の破顔で終はる報恩講

小鳥来る箒目あらき裏参道
靴をすぐ脱ぎたがる子や草青む
流水の相をあらはに川溜るる
一点も傷なき屋根や雪下し
白鳥の啼く声星を殖やしけり
散りどきを待ちてみしかに銀杏散る
鯛焼や記憶の薄れゆく父と
寒薔薇白極まりてみどりさす
離れてはまたも見直す松手入
冬囲島人の守る能舞台
山古志の鯉かたまつて春を待つ
渡し場に風音を聞く落のたう
里芋に縄文の火の匂ひかな
傾きし舟小屋の戸に注連飾
吊橋の揺るる真ん中溪紅葉
コスモスの中の笑顔を撮りにけり
長き夜のひらきしままや黙示録
足湯する背に迫りくる紅葉山
道に噴く融雪の水日を弾く
いつせいにレンズ向けたり鷹柱

他愛なき老いの繰り言秋日和
閉校や未来へつなげ文化祭
水底のやうな静寂や今日の月
真つ白なハンカチ心理学教授
離れてはまたも見直す松手入
今日で畑解雇されたる案山子かな
身にしむや白骨拾ふ長き箸
手術終え秋夕焼に指輪はむ
文学碑落葉踏みしめ巡りけり
たつぷりと贅肉のつき終戦忌
文化の日父の万年筆太し
掛軸の文字の流るる煤払ひ
こんにやくは今も三角おでん鍋
マフラーの折目ただして歩きけり
コスモスの中の笑顔を撮りにけり
リズムよきコンバインより稲埃
ひと曲がりごとに深まる山紅葉
復活のルーズソックス文化の日
秋灯し目がつぶれても見たき本
我が影のとんがってゐる寒さかな

村田恭子
久和原賢
渡辺信子
高柳 暁
小池旦子
関 千年雄
戸田 一子
浜田萱草
関矢紀静
市川輝子
羽生雅春
羽賀晴子
矢澤彦太郎
増田芳男
番場勢津子
佐藤捷司
鶴巻雄風
渡辺長子
宮田悦子
渡辺徳治
井澤秀峰
下條春秋
浜松智弘
菅井悦子
村田恭子
秋山保子
小林純子
久和原賢
森山暁湖
鈴木正芳
羽賀晴子
佐藤正子
佐山香代子
矢澤彦太郎
山本武子
村山靖子
水野宗子
金子 功
佐藤昭子
渡辺徳治
小栗八重
安原 葉
櫻井詩子
高埜健蔵
川久保妙香
佐藤とよ
鳥羽サチイ
佐藤正子
番場ノリ子
熊谷國男
清水恵子
金子よし子
村山靖子
村山靖子
渡辺信子
渡辺信子
渡辺信子
渡辺長子
佐藤昭子
佐藤 健
榎本栄子
丘 のぼる
赤塚五行
荒川完石

第12回新潟県

「花と緑」吟行会記

寺尾亜真李

秋日和の10月16日、第12回新潟県「花と緑」吟行会を開催した。句会場は、白山公園内の文化のかおり漂う燕喜館。参加者は20名。マスク着用。

吟行地は、湊町新潟の総鎮守白山神社と隣接する白山公園及びその周辺。白山神社の御祭神は、加賀白山の菊理媛大神で、拜殿には大船絵馬が飾られている。この日も七五三詣で賑わっていた。参道には、ぼっぼ焼きの出店も、蓮池を巡り、茶庭に入ると、合同句碑に出会った。

十三夜明日といふ空美しき
素十
早苗取り今我方に笠丸し
虚子

学問の静かに雪の降るが好き
みづほ
を読み、三師に思いを馳せる。
築山へ歩を進め、明治天皇
お手植の松、白山公園を創設

の楠本正隆の銅像等に、しばし往時を偲んだ。公園は回遊式で、ひょうたん池の周りを家族連れが散策していた。亭々とある黒松に薄紅葉も混じる。作句の素材が多い。

句会は2時間開会。山口啓介支部長の挨拶の後、選句。各自3句投句計60句より、句選うち特選1句。披講は川崎陽子参与にて肅々とすすむ。選評を山口啓介支部長、矢澤彦太郎顧問、井口光雄副支部長よりいただく。その後、成績発表、表彰となった。

井口光雄支部長の閉会の挨拶があり、3時半に閉会した。絶好の吟行日和に恵まれ、参加者も多く盛会裡に終り、有意義な吟行会であった。当日の成績は次のとおり。
(合点による)

- ()内は特選得点。
1位 10点 (2) 山口 啓介
2位 9点 (2) 渡辺 徳治
3位 9点 (2) 井口 光雄
4位 9点 村山 椿
5位 8点 (2) 佐藤 とよ
次点 8点 (1) 倉井 幸子
※同点の場合特選句数を上位。それでも同順位の場合は参加申込順とした。

作品代表句

- 獅子山といふ小高きに昼の虫
山口 啓介(新潟)
いしぶみを巡りていくつ秋惜しむ
矢澤彦太郎(燕)
タマ公の尻尾くるりと秋日和
川崎 陽子(新潟)
敗戦の景となりたる破蓮
渡辺 徳治(新潟)
神域のここも水音水の秋
井口 光雄(南魚沼)



- 板扉に添ひて抜け道椿の実
村山 椿(新潟)
秋麗や熨斗結びなる巫女の髪
佐藤 とよ(新潟)
藤の実や昭和も遠しラジオ塔
倉井 幸子(新潟)
今落ちし木の実に力ありけり
小出 利恵(新潟)
蓮の実の飛んで宇宙と交信す
村山 靖子(新潟)
秋気澄む一の宮なる松の色
平賀 寛子(長岡)
鳥居の中に古町の見ゆ秋日和
土屋 瞳子(新潟)
秋の雲余白ばかりの置手紙
田中いずみ(上越)
しろがねの秋の噴水はなやけり
熊谷 國男(新潟)
最後まで意地通したる枯蓮
旗本 春美(新潟)
敗荷のたしかなるものなかりけり
大井 則夫(新潟)
七五三写真撮影の巫女かける
広瀬喜代子(新潟)
一礼し進む参道秋さやか
伊与部京香(新潟)
手に触る黄に染む木の葉撫でてみる
後藤 敬作(新潟)
敗荷の折るるは祈る形かとも
寺尾亜真李(新潟)

旬会報

「庭」俳句会

令和4年12月10日

(通信)

菊脰孫と越後の味染しむ 佐藤 良信
 考へる人思はせる日向ぼこ 皆川 捷巳
 小春日の展望台に老夫婦 林 道子
 切符買ふすでに旅人秋高し 酒井 昭平
 風呂吹や母の写真の此方向き 大島 詠志
 用水路ふさぐ大物朴落葉 本多 義堂
 身に入むや高齢者向け詐欺講 佐藤 昭子
 家毀つ重機や枯葉降りやまず 大島 セツ
 落柿を漁る深夜のハクビシン 山本 美代
 鶯寄せぬ鴉凄じ秋の暮 森山 綱衣
 裸木の枝伸びのびと空を衝く 佐藤 健
 聖樹の灯消すや授乳の灯を残し 大島いと女
 無人駅となりし故郷山眠る

深沢あづき
 銀杏散り憩ひてをりぬ一輪車 今泉 卓也
 冬帽子米寿の顔のやはらかし 増田 信雄
 入相の灯はつれなくて冬の旅 大塩 春治
 その中に煩惱もあり掃納 大玉 雅之
 父の炊く術後の母の蜆汁 高橋 弘子
 干大根櫓で隠す筑波山 澤田 啓三
 亡き人の残る表札秋夕焼 柴田 善子
 ひと小路間違へてゐて秋刀魚の香 山之内喜七
 (報・山之内喜七)

上越若葉会

令和4年12月19日(例) 会場・割烹新柳

残り香を素手に枯紫蘇根刮きす 佐藤全四郎
 枯萩にはねる力の残りをり 市川 輝子
 出立の道はたがへど納め句座 大島 小春

「朱鷺」新春句会

令和5年2月15日(例) 通信紙上句会

冬耕の歌の先より暮れにけり 小関 等
 枯れてなほ懸崖菊のさまにかな 小林 千枝
 終刊に心を残す師走かな 相馬 芳子
 町へ出て師走の人に交りけり 曾武川京子
 煤逃や百円で買ふ文庫本 町田 綾子
 師と行きし二次会の道冬銀河 山本つや子
 城濠に鳴きて夜鴨の闇深し 吉村 直彦
 鴨の尻に雪のしづかなる 渡部 紀子
 引く波に駆けて海苔摘む海苔畑 井坂 儀一
 古時計止まりしままに冬籠り 梅谷 妙子
 起きあがり小法師と二人冬籠り 井上 祥子
 冬怒濤石は揉まれて丸みゆく 浜田 萱草
 サイドミラー手を振る母に夜の雪 金子真有美
 揃はぬも七草らしき粥を食ふ 絹沢 裕子
 稜線を朱鷺の舞ひゆく淑気かな 北 睦子
 文鎮を正させ孫の筆始め 若林 通子
 寒齋を耀るや親父の背筋のび 坂下 浅一
 御降りや争ひのなき世を願ふ 葛西ひろみ
 初挑戦句一つ載せる賀状かな 奥田 京子
 寄せ植ゑの主役は小さき福寿草 横山 一美
 豆炭が神様となる大停電 上野平典恵
 初夢は介護離れて二人旅 本田 早苗
 書初の二つ並べてまたほめる 宮川伊都子
 初詣晴着に深きたたみしわ 伊藤きよ子
 初山河双眼鏡で朱鷺捕ふ 赤塚 五行
 (報・赤塚五行)

かんばら句会

令和5年1月10日 会場・燕市中央公民館

テレビ消し静寂に遠く除夜の鐘 田中田鶴子
 ガラス越し老いもまた良し日向ぼこ 相場 祥子
 ご当地の絵柄楽しむ年賀状 大橋 初美
 日の丸高く成人の日や晴るる 金子加津久
 早朝の凍てつく道を救急車 吉田千代美
 朝市の魚の目覆ひ雪降る降る 関矢 敦
 凍てる朝食の仕度水の染み 野島 正子
 日本海朽ちし番屋に波の花 杉山 安子
 いにしへの詩歌尊し初山河 矢澤彦太郎
 (報・矢澤彦太郎)

新潟野火会

(新年紙上句会)

寒さうな影が鏡の中にあり 山口 啓介
 雪積もる山巒奥のその奥も 佐藤 とよ
 人日や子が連れ来たる婚約者

旗本 春美
裸木の天上を抜け鳥の声

土屋 瞳子
見送られ出荷一号鏡餅

渡辺セツ子
気付かない侍もあり福寿草

戸田 一子
子を成さぬ伯母にちひろの初

曆 番場勢津子
極月の藻塩の窯や海荒るる

小池 旦子
真向ひの五頭山紫に初景色

渡辺 長子
始まりも終りも戦手毬唄

村山 靖子
寄鍋のただそれだけで幸せに

大橋 節子
秒速の年賀の動画回し見る

番場ノリ子
志今なほ少し初山河

神田 絹子
会ひたいと出し会ひたいと来

る賀状 渡辺 啓子
雪しまきテールランプを道し

るべ 小林 風千
喉飴を舌で転がし雪の道

大越 千代
湯婆や遠き昔の波の音

酒井 道子
転勤の挨拶に来る五日かな

長谷川眞一郎
初空の雲と遠山睦み合ふ

菅家恵美子
雪踏みも子の影もなき通学路

阿達 秀昭

青空に一日のパワー福寿草

渡辺 イツ
去年今年ひとつも減らぬ飲み

葉 杉江 典子
数へ日のテレビドラマは総集

編 山口あつ子
(報・山口あつ子)

「風港」新潟句会

令和5年1月25日(水)
(紙上句会)

人柄の旨み出てゐる大根漬

星野ヒロ子
腕白の先に立ちたる注連貫

佐藤 捷司
老いたれど別腹といふ雑煮碗

岩淵フジノ
伝来の鉄瓶の湯気年立ちぬ

宮田 悦子
屋根の雪下ろし全身湯気立つ

る 佐藤三代子
寝返りを打つや遠きに冬の雷

くつくつと七草粥の香りたつ

横森 宏子
新しき空気となりぬ深雪晴

森山 暁湖
(報・森山暁湖)

私の吟行地

名水「龍ヶ窪」

宮沢 房良

四十五年続いている「岩すげ俳句会」は月例句会のほかに、何時の頃からか毎年七月には吟行句会を行ってきました。これまで随分色々な所を吟行しましたが、最近三年は、コロナ禍の影響や会員の高齢化などで、地元津南の「龍ヶ窪」で吟行を行いました。

「龍ヶ窪」は環境省の名水百選に選定されており、深い森に囲まれた池は霧がよく発生します。河岸段丘が広がるこの地域は水源が少なく、龍ヶ窪の水が人々の生活になくてはならないものとなっています。そのため龍ヶ窪の伝説が数々残され神聖な場所として大切に守られています。面積は八・三ヘクタールに及び溜れることの無い池の周辺は針葉樹、広葉樹と林相が変化し、多数の野鳥、動物が生息しています。

木下蘭 抜け家々に山清水
房良

加茂川周辺

戸田 一子

加茂市が癒しの町と言われているのは、市の中心地に加茂川がゆったりと流れている故かもしれない。加茂川は粟ヶ岳から発し信濃川へと注ぐ一級河川で、九つの橋が架かる、そんな加茂川の河川敷が、私のウォーキングコースで吟行地である。

加茂川の中洲には雪解け前に猫柳が芽吹き、やがて葎が芽吹く、土手の桜並木が葉桜に変わる頃、加茂川を差し渡し五百余の鯉職が泳ぎ、県内各地からの親子連れで賑わう。河川敷にはアヤメ、紫陽花をはじめ野草も多く見られる。八月十四日の「越後加茂川夏祭り」の花火「ナイヤガラ」は川の町ならではの火花が川面を走り壮観だ。加茂川には雑魚に混じり鯉や鮎を見かける事があり、秋には鮭が遡上する。そんな季節になると鴨などの冬鳥で賑わう。雪を被った粟ヶ岳がどっしりと構え町を見下ろしている。

町川に九橋ありて冬の鳥
一子

豊穣の国仲路

仲川 康子

私の住む吉井本郷は、丁度佐渡市の中央に位置する。目前に広がる国仲路が私の吟行地である。大きな特色は四季折折の野生の朱鷺が見られることである。壮大な朱鷺の野生復帰プロジェクトが展開されている地である。結社「春耕」では、棚山波朗主宰の時平成二十五年から五年間「朱鷺俳句」の募集があり佐渡の会員が中心になり取り組んだ。国仲平野の朱鷺を観察し投句したものである。現在野生下の朱鷺は五百羽以上になった。他の野鳥と同じように国仲路の遠近に吟行出来る。

豊かな国仲の自然や風物は句材の宝庫である。私の好きな句材は、田植の後の水田に映る春の雲、緑の海原のような青田波、青田風、夕焼けの空の彼方から帰る朱鷺の群れ、秋の蒼天を悠々と巡回する朱鷺等多くある。春夏秋冬豊穣の国仲で俳句活動を生きたがいに余生を楽しんでいる。

初声の朱鷺おほどかな国仲路
康子

気嵐

石黒正勝(なし)

群がりを離れ飛翔の鵠二羽
もののふの掛字を残し冬の寺
たわわなる柚子を育てて屋敷内
晩秋の鳥影うすく入日かな
気嵐の濛面に立つる夜明けかな
剪定の缺に力梅ふふむ
本堂へ耳門開けある涅槃寺

雪解

熊谷國男(一章)

寒晴の鶯の高音や天守閣
北窓を開く宇宙の星あふれ
蘆原の雪解の匂ふ瀉日和
杭よりも鯉高く跳ね水温む
連翹の冷たき雨に艶めけり
さざ波は風のささやき春の瀉
子ら消えて菜の花畑迷路めく

動物

高埜健蔵(銀化)

むくと起きのつそりと出る恋の猫
うぐひすが鳴き贅沢な庭となる
窓ガラス拭く手が止まる初燕
後ろ手を組むがに鴉春の畦
ただいまの声に子猫の飛び出し来
いま以て長屋住まひの燕の子
雀の子コイン精米所が根城

桐一葉

服部かねよし(春野)

鯛雑煮父の知らざる世を生きて
啓蟄や庭へ持ち出す椅子二つ
百姓の顔を残して更衣
大根蒔く運命線に種をのせ
桐一葉一日独りの畑仕事
寒月光病める地球を照らしたる
雪折れやひとつ時代の終はる音

私の近詠



『私の近詠』は原則として、
アイウエオ順に掲載。(編集部)

成木責

上野昭一(かまつか)

古城址の道は急坂藪柑子
成木責声も仕種も祖父に似せ
村名の残る鎮守や梅一輪
餅花や旧の字造りの太柱
雪折れの片付けを待つ狭庭かな
救急音とほくかすかに雪しまく
春泥や通年施工の大圃場

出水

鈴木正芳(銀化)

まさかてふ坂転がりて出水かな
洪水の垂直避難閣深し
水没のマイカーの屋根月の眉
無風なる出水の引きし大通り
水見舞受くるや泥の付きし手に
銀河澄む瓦礫に山のある静寂
流水の知恵の輪いくつ出水川

手足付き

たが啓子(澤)

サンガラスこの世このごろ遠さかる
どの家も鍵あいてをり水の秋
ハロウィンやカクレクマノミ手足付き
松茸ぞ一つあるほれここあそこ
ネガティブ・ケイバビリティ雪積もる
雪催ひ毛穴見えな化粧して
黒マスク大き乙世代の息子

春灯

宮田悦子(風港)

楚々と織る幾何学模様春灯
連山の頂まぶし凍渡
花通草五葉の蔭に咲きにけり
岩石の容貌なりて残る雪
鶯やしはしゴルフの打順待ち
水加減窓越しに見る植田かな
万葉の坂戸城址や風薫る

事務局だより

幹事長 熊谷國男

◇去る3月12日(日) 令和5年度の通常総会及び併催句会を開催しました。今回の総会は昨年度の総会における役員改選で発足した山口新支部長体制の下での初めての総会でした。上程した各議案はそれぞれ可決承認され令和5年度の活動がスタートしました。

◇総会終了後の当面の課題は、7月30日開催の第33回「花と緑」新潟県俳句大会です。これは当支部の事業の中で、最大のイベントです。昨年はコロナ禍での開催にも拘わらず、七五〇組、一五〇〇句の応募がありました。応募句が一五〇〇句を越えたのは実に第24回(平成25年)以来のことでした。今年度はコロナ感染対策も大幅に緩和された状況での開催です。応募句と大会当日の参加者が昨年よりさらに増加するよう会員皆様のご協力をお願い致します。なお、今年度の大会に対し、新潟日報社より「後援」の承諾をいただいております。

◇「県俳句大会」の後に、例年通りの事業として

「秋の吟行会」を10月8日(日) 加茂山(青海神社) 会場「加茂市民公館」 「県支部大賞」の募集句を10月初旬より開始する予定です。

◇総会で支部規約に事務所の住所と設立年月日を追加しました。これは、団体として金融機関での口座の新設や名義変更の手続の際の身元確認の項目として不可欠のものです。「おれおれ詐欺」事件の発生以降審査が厳しくなりました。

◇総会の出席者は34名でした。開催に当たり、事前に全会員より出欠届のご提出をいただきました。欠席の理由が「高齢による体調不良」が目立ちました。厳しい高齢化の実情をあらためて認識しました。

◇今年の桜の開花が例年より随分早くなっています。新潟では本号が皆様の手元に届く頃には満開の時期を過ぎてもう葉桜になり始めていることでしょう。いろいろなところの桜を堪能し、「花」の句をたくさん詠まれていることでしょう。

◇令和4年度新入会員紹介 鈴木正芳(村上市) 銀化 たが啓子(新潟市) 澤 高埜健蔵(佐渡市) 銀化 服部かねよし (南魚沼市) 春野 宮田悦子(南魚沼市) 風港 新会員の皆様のご活躍を期待いたします。

◇死亡・退会 令和4年1月〜12月 (死亡) 荻野時子 中野弥生 佐山香代子 (退会) 大塩千代 小島露峰 小松スミ 高木文里 山田晴女

令和5年1月〜3月15日 (死亡) 久和原賢 小林直司 山本修身 藤井青咲 (退会) 小野攸子 舟崎正枝 松原 南 渡部紀子

ご逝去された方々には、生前のご協力に感謝いたしますとともに心より哀悼の意を表します。

なお、藤井青咲氏は平成8年より平成19年の間、副支部長・支部長を歴任しました。(台草)

(編集後記)

梅の花が見頃を迎えています。全国的には桜の開花宣言がなされているところもあるようですが、新潟はもう少し待たなければいけません。それでも蕾が少しずつ膨らんでくると心が弾みます。

また、この時期は卒業や入学、入社、転勤など人生の大きな節目を迎える人も多く、夢や希望に胸を膨らませていることでしょう。

その反面、大きな環境の変化に戸惑い、緊張や不安で心を擦り減らしてしまう人が出てきやすい時期でもあります。環境の変化が何もなくても何となく憂鬱という人もいます。まことに春愁の季節です。家族や周囲に塞ぎ込んでいたり、元気がない人がいたら声をかけ、「傾聴」することとがとても大切だと言われています。「頑張れ！」と励ますのではなく「話してくれてありがとう」と伝えることで心が癒されるそうです。このような対応を心がけたいものです。

俳句は、「省略の文学」で一考。俳句の基本は、全部を言わない。評価は相手にまかせる。説明はしない。芭蕉曰く「謂い応せて何がある」と言った。俳句は省略しないと「十七音」に収まらない。しかし、そのことがむしろ、連想、含蓄、余情、として浮かび上がってくる。

俳句は、作る事より読むことが難しいかもしれません。例えていえば、俳句は、「フリーズドライの食品」のようなもの。読者は、熱処理をするようにそれを復元して味わわなければならぬ。戻し方が悪いと、元の味と違うものになってしまう。いかに上手に戻すか、それが読み手の技術ということになる。なるほど、「読み手」にも責任がある。これを、責任転嫁というのかもしれないが、勝手に納得し、安心している今日この頃である。

俳句は、「詠み手」と、「読み手」の共同作業なのだ。むしろ俳句は、「詠む」より、「読む」鑑賞のほうに重きを置かれているのである。このことから、私は「平明」で、「詩情」のある句を現在では求めているが、なかなか上手くないのが実情。困ったものである。

(渡辺徳治)